愛宕山

あたごやま

花街のおはなしをするのがこのごろはちょっとやりにくなりまして、そらまあ花柳界は今でもありますし、芸妓はん舞妓はん、今でもちゃんとあるんですが、雰囲気がゴロッと変わってしまいました。まして女郎買いのほうのはなしは歴史の時間かなんかで勉強してもらわんならんような、えらいむつかしいことになりまして、大阪でも、あっちゃこっちゃにそういうとこがあったんですがな。私らも研究のためにそういうところへちょいちょい寄せてもろたことがございますが、今では無くなった……いうことになってますが、近頃のことはとんと存じまへんので……。芸者はんのほうは今でも盛んですが、お座敷の気分は随分変わってしまいました。噺のほうでもそうです。落語でも初めはごく単純なくすぐりでみなさんがたお笑いになる。そのうちにどんどんとこう聞きこんでくるというと、そういうのんでは満足がでけんようになって、もうひとひねりした考え落ちというようなものが好まれますな。スーッと聞いてスーッとわかるちゅうような噺、それからなかなか考えんとわからんてな噺やら、いろいろとあるんです。えェごくまあ手近な考え落ちでしたらこういう噺がありますなァ。

「あんたなんでそんなうかぬ顔してんのん」

「お父さんあの子あきらめェ言うんです」

「あの子て、あのさっちゃんかえ」

「そうでんね」

「どこがいかんの」

「あの子に別に悪いところはないんやけど、実は、わたしが若い時分にある女に生ました子で、あの幸子というのは、つまりおまえとは腹違いの兄妹になるさかいに、あれをあきらめてくれ、と」

「えっ、ほな何かいな、あれお父さんの子か、あの子。まあ知らなんだ。……かめへん結婚しなさい」

「そんなこと、兄妹で夫婦になれますかいな」